平成２６年　第１回定例会

一般質問　　岡元由美議員

平成２６年　２月２７日

▶質問

　大田区議会公明党の岡元由美でございます。
初めに、来月の末からスタートいたしますＮＨＫの朝ドラ「花子とアン」について、大田区の取り組みを伺います。
　「梅ちゃん先生」は蒲田が舞台でしたが、実在の人物ではなく、ロケ地や特定の場所もない中、松原区長がどこに行っても「梅ちゃん先生」をアピールされ、大田区中に梅ちゃんブームを起こされました。まさにトップセールスのたまものであったと思います。また、出演者の方々もＮＨＫ主催の大感謝祭、大蒲田祭、最終回を見る会等のイベントに参加して盛り上げてくださいました。区としても前年の９月には梅ちゃん通信をスタートし、12月７日に大田区「梅ちゃん先生」推進委員会が発足しました。番組終了まで様々な取り組みを行い、その結果、多くの方が蒲田に足を運ばれました。
　今回の村岡花子さんの場合、中央三丁目に赤毛のアン記念館・村岡花子文庫がありますが、放送中も閉館とのことで大変に残念です。村岡さんは、区長が新春のつどいで、馬込文士村の大森地域の中心的存在と紹介されたとおり、大正８年から亡くなられる昭和43年までのおよそ50年の長きにわたって大田区の住人であったわけです。現在、郷土博物館では、昨年の生誕120年を記念して「アンの見た夢村岡花子の大森時代」を展示しています。直筆資料や村岡夫妻と５歳で病死されたご長男の家族写真、ヘレンケラー来日の際、通訳を務められたときの写真など貴重な品々を拝見いたしました。大変に充実した内容で感動いたしました。しかし、川瀬巴水特別展と同様、こちらも３月２日で終了とのことで、朝ドラが開始したときは常設展に戻ってしまいます。「梅ちゃん先生」のときもそうでしたが、ドラマを見て蒲田に行ってみようとなるわけですから、放映されてからが大事です。記念館が閉館のままであるなら、郷土博物館がその役割を担って朝ドラのヒロインとしての村岡花子さんのスポット展示を続けていくべきと思いますが、いかがでしょうか。また、記念館に近い文化の森はどのように活用されるかお伺いいたします。

大田区では、馬込文士村を観光資源の一つとして捉えていますが、文士村の一員である村岡花子さんをきっかけに、馬込文士村の存在を国内外の人に知っていただく千載一遇のチャンスであると思います。先日、郷土博物館の地元の商店会長から、川瀬巴水の特別展に大勢の方が来訪され、西馬込駅周辺の店舗にも立ち寄られていると伺いました。郷土博物館では、川瀬巴水特別展終了後、９月までの朝ドラ放映中の展示はどのような準備をされているのでしょうか。ぜひ馬込文士村の文士にかかわる展示をお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

大森地域の活性化については、地域の皆さんの自発的な盛り上がりや仕掛けを期待したいところですが、放映期間はわずか半年ですから、やはり区が主導していくべきと考えます。「梅ちゃん先生」のときは、ＪＲ蒲田の東西口にしっかりとした商店会があり、皆さん、「梅ちゃん先生」の舞台、蒲田に来てください、こんなおいしいものがありますよ、工学院では大田区今とむかし写真展をやっていますよと、蒲田駅におり立ってもらえばよかったわけですが、今回は大森駅からの誘導が必要です。例えば大森駅山王口で天祖神社の文士の銅板レリーフを見ていただき、お買い物を楽しみながら、おおもりのもりで足湯につかって文化の森へ、近隣への配慮をしながら、赤毛のアン記念館の周辺を回って臼田坂を上り郷土博物館へ、さらに６月には完成する新馬込橋で川瀬巴水が描いたその場所で欄干に設置された「馬込の月」のレリーフを見ていただく、帰りは環７から尾崎士郎記念館へ、さらにカタルパの小径を通って山王草堂記念館へ、５月にはカタルパの花を楽しんでいただくといったコースへの誘導です。徒歩が難しい方にはバスの１日乗車券を利用していただけるような情報の提供など、来られた方に満足していただける工夫が必要です。そのためにも区や観光協会のホームページの充実が求められますが、どのように推進されるかお伺いいたします。

昨年、スポーツ・観光推進特別委員会で長崎市を視察させていただきました。その際、長崎さるくガイドの方に案内していただきました。非常に熱心にわかりやすく説明していただき、改めてガイドの重要性を感じました。馬込文士村については、ＮＰＯ馬込文士村継承会や馬込文士村ガイドの会といった専門家がいらっしゃるわけですから、こういった方々のご協力を得ながら、朝ドラを見て大森にお見えになる観光客を迎える環境を整えるべきと考えますが、いかがでしょうか。

尾崎士郎記念館がオープンした翌年、命日を記念して開催された飄々祭のポスターの掲示をお願いに伺ったところ、駅ビルの書店に尾崎士郎コーナーをつくっていただきました。先日書店に行きましたが、「赤毛のアン」を探すのが一苦労でした。ぜひ各書店にもご協力をいただいて、お母さんから娘へと読み継がれる「赤毛のアン」ブームを大田区から起

こしていきたいと思いますが、いかがでしょうか。

「梅ちゃん先生」では番組とものづくりのコラボによる大田区の魅力発信ができました。今回は文学や教育分野との連携により、梅ちゃんから花子さんへ、大田区の多彩な魅力の発信で大森の活性化が図れることを期待いたします。

次に、交通不便地域の対策について伺います。先ほどの山崎議員と重複する部分もありますが、もう一歩深く質問させていただきます。

現在、未来プラン10年の後期が策定中ですが、基本目標２の施策２「快適な交通ネットワークをつくります」の中で、地域交通ネットワークの整備において、コミュニティバスの導入検討、運行支援が主な取り組みから外されました。その背景として、これまでの成果の中では、たまちゃんバスが導入され、地域交通網の機能が向上したとあります。コミュニティバスについては、長年様々な調査や検討が行われ、候補地域として選定された矢口、南馬込、西蒲田の３地域の中で、最終的に矢口地域にたまちゃんバスが導入されました。導入当初、坂道の多い馬込地域では、次は馬込との大きな期待がありました。中馬込は、先日の大雪でチェーンをつけても清掃車両が走れず、ごみの収集ができなかった坂道が四方にあります。また、調査検討がなされた時期より10年近くが経過し、高齢化は進み、交通不便に伴うニーズはさらに高くなっています。

大田区は、コミュニティバス運行の目的について、高齢者等の移動手段や観光の振興の対応なども踏まえ、主として公共交通不便地域の解消のためとしていますが、馬込の現状に対してどのような見解をお持ちでしょうか。また、矢口地域以外の交通不便地域について、この５年間、どのような検討がなされたのか伺います。

平成23年第３回定例会における我が党の広川議員の質問に際し、たまちゃんバスの課題を挙げておられます。

利用促進の強化、サービス水準の改善、事業採算性の向上の３点です。利用促進の強化、サービスの改善については、利用案内の配布やポスターの掲示、イベントでの車両展示などのＰＲ活動により周知を図り、通勤・通学時間帯の増便を実施されました。また、現在も矢口三丁目へのコース延伸が検討されています。しかし、３点目の採算性の向上については、24年２月から15便から19便に朝夕４便増便した関係で、総利用者数は増加しているものの、１便当たりの利用者数は、運行開始の平成21年度の7.4人、22年度の6.7人、23年度6.7人、24年度6.5人と減少しています。むしろ増便による人件費の増加で、24年度の収支額はマイナス992万円となり、23年度のマイナス820万円を大きく上回る結果となってしまいました。

24年度で東京都の補助金も終了していますが、25年度の収支額はどのくらいになると

見込まれていますでしょうか。また、増便した朝夕の便は、便別利用人数が19便の中で少ない結果についてどのような見解をお持ちでしょうか。さらに、事業採算性の向上に結びつく方策はどのような検討がなされたのか伺います。

コミュニティバスを導入している他の自治体も赤字が続いていると伺っています。その中で、20年４月から試行運転を開始している北区のＫバスは利用人数が年々増加し、新たな路線の導入も検討されているそうです。路線バスの廃止等、背景となる条件は異なりますが、２台のバスで１周40分と１周20分の二つのルートを走行し、乗り継ぎによりショートカットして目的地に着くことができます。また、始発の田端駅着が７時17分、最終の駒込駅発20時22分です。たまちゃんバスは、始発でも武蔵新田駅に着くのは８時21分、最終の武蔵新田駅発が18時20分です。この時間設定では、通勤や通学の足にはなり得ません。地域の方が利用する場合、朝は駅に向かい、夕方は駅から乗車するわけですが、増便しなくても、例えば起点を矢口中学校にすると、８時６分には武蔵新田駅に到着します。この間も一律に35分間隔ではなく、利用頻度の少ない時間帯は広げるなどの対応で利用者数の増加、経費の削減はできないでしょうか。Ｋバスはワンコイン100円ですが、これを120円にすれば赤字が解消できるそうです。このような成功事例も当然研究されていると思いますが、参考にできることはありませんでしょうか、お伺いいたします。
コミュニティバスの場合、たとえ大雨や大雪で利用する人がいなくても走らせなければなりません。昨年の７月から９月の３か月間の日別便別利用人数を見ると、年間で一番利用人数が多い時期にもかかわらず、全く誰も利用しなかったバスが11便、１人だけが18便ありました。全区間あるいは一定の区間、空で走行しているバスが 相当あることが想像できます。

千代田区では、乗り合い型の地域福祉タクシーを運行しています。１回100円ですが、60歳以上の区民、身体障害者手帳、愛の手帳、精神障害者保健福祉手帳を持った区民、妊婦及び未就学児連れの保護者には無料乗車証を発行し、文字どおり福祉を目的としています。

また、ドア・ツー・ドアで移動できる交通手段としてオンデマンド交通があります。オンデマンドを導入している自治体の多くは、東京大学大学院が開発しているオンデマンド交通システムを導入しているそうです。蓄積された利用者情報のデータベースと独自の計算システムで定時性が担保され、低コストを実現しています。プロジェクトの名称はコンビニクルです。

平成21年度にたまちゃんバス運行後、導入検証結果を踏まえた運行計画の策定がなされてきたようですが、検討の中には当然オンデマンドも含まれていたと思います。どのよ

うな結果になっているのでしょうか。また、オンデマンド以外にどのような可能性がありますでしょうか。

たまちゃんバスは、５年間の試行運転で26年度の上半期には検証され、今後のコミュニティバスについて結論が出てくるものと思います。採算を考えれば、矢口と同じ形でのコミュニティバスの運行は非常に難しいと思います。しかし、歩行が困難な高齢者の介護予防やひきこもり予防の意味からも何らかの対策は必要です。区内の交通不便地域の改善をよろしくお願いいたします。

最後に、発達障がい児の支援について伺います。

大田区では、（仮称）大田区発達障がい児・者支援計画（素案）を作成されました。策定の趣旨には、福祉部、保健所、こども家庭部、教育委員会事務局による全庁的な視点から発達障がい施策の全般について検討を重ねた結果、発達障がいのある方への計画的な施策展開が必要と判断し、「発達障がいのある方もない方も、安心して暮らせるまちをつくります」を基本理念として策定するとあります。公明党がこれまで主張してきた切れ目のない支援への大きな前進であり、保護者の皆様、関係者の皆様にとって大変喜ばしいことと評価いたします。

発達障がいの現状と課題の中で、特別支援学級に通う児童・生徒が大幅に増加している理由の一つに発達障がいが挙げられています。毎年区立小中学校各校から報告されている授業中に特別な支援が必要と考えられる児童・生徒の人数は、平成16年度には小学校175人、中学校92人の合計267人であったものが、平成25年度には小学校513人、中学校215人の合計728人となっているとあります。小学校は約３倍に増加しています。今後も増加し続けることが予想されます。素案には、発達障がいの特性として、特性のあらわれ方が個々により様々であること、そして、特性に配慮した対応により様々な困難が軽減され、安定した社会生活を送ることが期待できるとあります。一人ひとりの特性に配慮した対応が必要であるということです。

発達障がいの療育の効果は10歳までが大事とも聞いています。小学校のときに十分な対応が受けられれば、その後の不登校やひきこもり、鬱や双極性障がいといった気分障がいなどの２次的な障がいを防ぐことも可能です。しかし、発達障がい児をお持ちのお母さんによれば、民間の療育は大変高額で、効果があってもお金が続かないとのことでした。せめて区内の小中学校では、よりよい療育を平等に受けさせていただきたいと思います。

まず、教科書についてですが、固定学級に通っている児童・生徒で、特定の教科の学力が比較的高く、通常学級の授業についていけるような場合、通常学級の教科書が支給され、能力に応じた授業が受けられるのでしょうか。校長先生の判断と伺いましたが、個別の能

力を生かす細やかな配慮をよろしくお願いいたします。

また、毎年新学期に児童・生徒の個別の教育支援計画と個別指導計画を作成しているようですが、作成の目的は何でしょうか。作成のために保護者が現在の様子とこれから伸ばしたい力、つけたい力を記入するようです。

保護者の中には障がいについての理解が十分ではない場合もあり、１年間でどこまでの成長を目指すべきかわからないこともあると思います。また、それを引き出す教員の経験や理解、能力の差があることも事実です。長期的な目標を見据えた１年間の目標を設定するには、経験豊富な教員の力が必要です。指導計画はどのように決められるのかお伺いいたします。

毎年の積み重ねで将来が決定するかもしれない重要な計画です。学年ごとに対応されているとも伺いましたが、ぜひ総合力で子どもを中心に置いた計画の策定をお願いいたします。

次に、発達障がい児の中学校卒業後の進路について伺います。

文部科学省が公表している昨年３月の特別支援学校及び特別支援学級の卒業後の進学率を見ますと、視覚障がいは100％、聴覚障がいは99.8％、知的障がいは98.6％、肢体不自由が98.5％の特別支援学校の生徒に対し、特別支援学級の生徒の進学率は93.6％と低い状況です。大田区の昨年の卒業生の進路状況をお知らせください。

ひきこもり等で進学が困難なケースもあると思いますが、このような子どもたちの支援、進路決定には誰がどのようにかかわっているのでしょうか。また、固定学級だけではなく、普通級から通級指導を受けている生徒の卒業後の進路は様々ですが、障がいがうまくコントロールできない子どもも少なくないと思います。義務教育が終了しても支援の継続が必要だと思いますが、高校生に該当する18歳までの子どもたちの相談や特別支援教育はどのように行われるのでしょうか。中学生になると、特に体が大きくなり、力も強くなって、母親では対処できない等、発達障がいに起因すると思われる相談が寄せられています。こういったお子さんやご家庭に対して区はどのように支援していくのでしょうか。

対象の児童・生徒の増加と支援の強化のためには、当然人的措置、財政措置が不可欠です。大田区の子どもたちがその可能性を最大限に生かせるような支援の充実を要望し、全ての質問を終了いたします。ありがとうございました。

＜回答＞

▶ 田中地域力・国際都市担当部

私からは、「花子とアン」の観光施策に関連いたしまして、いただいたご質問のうち、２点についてお答えいたします。

まず、「花子とアン」の関係で、赤毛のアン記念館に近い大田文化の森はどのように活用するのかというご質問でございます。赤毛のアン記念館・村岡花子文庫は今年いっぱい休館となっておりますが、放送を見て来られる方につきましては、大田文化の森を起点としまして、郷土博物館を含めた区施設、民間施設、商店街等でイベントを実施し、回遊性を高めるとともに、おもてなしの心を持ってお迎えしてまいりたいと考えております。現在、推進委員会を立ち上げまして企画を検討しているところでございます。大田文化の森につきましては、３月31日にホールを使用しまして、「花子とアン」の第１回放映を見る会を計画しているほか、１階展示ホールで馬込文士村を含めた期間展示や図書室、調理室等を使用しての催しを予定してございます。また、情報コーナーを設置しまして、来られた方に満足していただける情報が提供できるように工夫してまいりたいと考えてございます。

次に、馬込文士村のガイドの専門家のご協力をいただきながら観光客を迎える環境を整えるべきだというご質問でございます。区内外から訪れます来訪者につきまして、ガイドの重要性につきましては議員ご指摘のとおりと考えてございます。今回、推進委員会の中に具体的事業を検討する企画部会を設けました。その企画部会では、地域で活発に活動されていますＮＰＯ団体等にお声をかけさせていただきまして、メンバーとして入っていただいているところでございます。馬込文士村継承会、馬込文士村ガイドの会につきましても、この企画部会に入っていただいております。ただいまのご意見を踏まえまして、今後企画部会で具体的検討に入ってまいりますので、よろしくお願いいたします。私からは以上でございます。

▶ 柿本産業経済部長

私からも「花子とアン」関連の２問についてお答えさせていただきます。

まず、駅からの赤毛のアン記念館など周辺の散策コースの誘導についてのご質問でございます。交通機関では大森駅のみならず、西馬込駅、また池上駅からの来訪者も多くなる

と想定をしております。駅からの誘導方法につきましては、ＪＲ大森駅との連携も含め、各駅での情報発信等を鉄道事業者と具体的に検討してまいります。

また、馬込文士村関係施設のほか、誘導路線となる駅からの商店街や民間施設のイベント情報、お土産品、食事処などを含んだマップの作成も検討しております。さらに、季節に応じたコースの紹介、交通アクセスの案内など様々な角度から魅力の発信も必要と考えております。大田観光協会や地域の活動団体の方々と連携して、区や大田観光協会のホームページに今回の取り組み用のページを設けるなど、様々な方法により情報発信し、来訪者の誘導につながるよう工夫してまいります。

次に、書店の協力をいただきながら「赤毛のアン」ブームを起こしていきたいとのご質問ですが、書店で「赤毛のアン」をはじめ、村岡花子さんの図書を扱っていただくことは、馬込文士村の１人であった村岡花子さんを知っていただくことになり、ひいては馬込文士村に関心を持っていただける一歩になると考えられます。書店組 合を含めた関係機関に対して適宜必要な情報発信を行い、地域の中から「赤毛のアン」を盛り上げようという機運の醸成を図ってまいりたいと考えております。私からは以上でございます。

▶ 坂本こども家庭部長

私からは、発達障がい児の支援についてお答えいたします。

発達障がいのあるお子さんやご家庭に対しての支援でございますが、区では、発達障害者支援法に規定されている地方公共団体の責務を踏まえ、発達障がいにより支援を必要としている方々の様々な課題を解決するため、（仮称）大田区発達障がい児・者支援計画の策定に向け取り組んでおります。本計画においては、乳幼児期における早期発見・早期支援、学齢期から青年期・成人期までのライフステージに応じた切れ目のない支援、地域支援力の向上と人材育成・啓発の促進、施策を推進する基盤整備の四つの目標の実現を掲げております。

お話のありました学齢期のお子さんへの支援については、本計画を着実に推進するとともに、学校や区の関係部署が児童相談所、医療機関などの関係機関と連携を強化し、個々の状況に応じた重層的な支援に努めてまいります。私からは以上でございます。

▶ 川野まちづくり推進部長

私からは、コミュニティバスに関するご質問に順次お答えを申し上げます。

最初に、馬込地区の現状についてでございますが、馬込地区は坂が多く、起伏のある地形でございまして、ご高齢の皆様の移動環境の面でも課題があると認識しているところでございます。同時に、馬込地区は、馬込文士村や郷土博物館、桜並木などの多くの観光資源を有しておりまして、観光の視点から捉えた公共交通のあり方も研究する必要があると考えてございます。そのようなことから、利用者ニーズへの対応、また、ルートの設定など矢口地区での試行運転の中から見えてきた様々な課題を踏まえまして、加えて、観光、福祉の観点も含め、関係部局と連携を図りながら検討を重ねてまいります。

次に、矢口地区以外の交通不便地域についての検討に関するご質問でございます。平成19年度にコミュニティバス導入候補地域の選定を行い、平成21年10月より矢口地区においてコミュニティバスの試行運行を行ってございます。この間、地域の交通ニーズに対応するなど一定の地域貢献をしているものの、利用者層の偏りや事業採算性、また運行ルートに関する交通管理者との長期にわたる協議など多くの課題も抱えているところでございます。このため、新しい地域に導入する場合は十分な検討が必要でございます。引き続き、矢口地区の試行運転の状況を踏まえながら、観光や福祉などの幅広い観点から導入の可能性について検討を行ってまいります。

最後に、オンデマンド交通等に関するご質問でございます。オンデマンド交通は、需要に合わせた乗り合いタクシー等を活用した公共交通機関でございます。導入に当たりましては、地区の道路状況、幅員、需要を見積もるなどの検討が必要となります。矢口地区では、現在運行しているミニバスをオンデマンド型に運行形態を変更するのは、エリア内の交通量、また道路の幅員等から難しいものと考えてございます。たまちゃんバスにつきましては、需要を高めるため、ルート変更、運行本数を増やすなど利用者の利便性の向上に努めており、引き続き地域の皆様の移動手段として貢献できるよう検討を重ねてまいります。私からは以上でございます。

▶ 赤阪都市基盤整備部長

私からは、たまちゃんバスの具体的な運行に関するご質問にお答えいたします。

まず、平成25年度の収支額の予測についてのご質問にお答えいたします。収入見込み額

につきましては、570万円ほどでございます。支出見込み額につきましては、この間、人件費、それから燃料費の上昇などがございまして1680万円ほどと見込んでおります。したがいまして、収支額につきましては1110万円ほどの支出超過と見込んでおります。利用人数でございますけれども、昨年の６月、７月、８月は猛暑の影響もありまして、こういう月につきましては、前年同月比５ポイントの人員の上昇を見ました。結果としますと、年間の乗車人数につきましては４万5000人ほどということで、ほぼ前年並みと見込んでおります。１便当たりの利用人数につきましては6.6人ということでございます。

続きまして、増便をした便の利用状況についてのご質問でございます。１日19便のうち、運行時間帯によって利用者に差がございます。特に昼間につきましては、買い物とか通院などで非常に多く使われております。また、朝夕につきましては、ご指摘のとおり、朝は特に夕方より利用者が少ない傾向にございます。今後につきましては、朝夕の利用状況につきまして分析をしまして、加えて利用者アンケートの回答などを参考にし、コミュニティバス検討会議、また同作業部会におきまして改善策を検討し、実現可能な対策をとってまいりたいと考えております。

続きまして、事業採算性の向上についてのご質問にお答えいたします。課題であります利用者の増加、それから採算性の向上を目指しまして、利用者アンケートを実施しました。また、作業部会で具体案を練りまして、矢口地域のコミュニティバス検討会議で矢口三丁目への運行ルートの延伸を検討してまいりました。おかげさまで各方面のご協力によりまして、ルートの延伸につきましては26年４月より実施の予定でございます。また、運行収入以外の増収を図るということで、バス車内の広告掲載募集につきまして継続的に実施しております。今後につきましては、利用案内についても広告掲載募集を行う予定でございます。さらに、地域が主体になって、多摩川七福神めぐりなどを企画しております。たまちゃんバスを活用していただけるように工夫をしてまいりたいと考えております。

最後に、他自治体のコミュニティバスの成功例の活用についてのご質問にお答えします。コミュニティバスの運行につきましては、地域特性、それから地域の交通環境が大きく影響いたします。今までも他自治体の事例につきまして十分調査をしております。今後につきましても、ご指摘の北区のＫバスも含めまして検討いたしまして、矢口地域で活用可能な事例は参考にしてまいりたいと考えております。実施に際しましては、矢口地域のコミュニティバス検討会議に情報を提供いたしまして、同作業部会で十分検討の上、対応していきたいと考えております。以上でございます。

▶ 勢古教育総務部長

私からは、赤毛のアン記念館、郷土博物館に関するご質問にお答えをさせていただきます。

記念館が閉館のままであるなら郷土博物館がその役割を担い、村岡花子さんの展示を続けていくべきとのご質問でございますが、郷土博物館では、ＮＨＫ連続テレビ小説の放映に向け、３月２日まで馬込文士村常設展の中で村岡花子さんのコーナーを拡充し、「アンの見た夢村岡花子の大森時代」と題した展示をしてございます。

この展示に当たりましては、記念館などから期限つきでお借りした写真や手紙などを展示し、紹介しているところございます。記念館の展示物は、ドラマとの関係もございまして、山梨県など各地での展示も予定され、大田区でお借りできるものにも制約があるようでございますが、引き続き記念館とは連携を進めてまいりたいと考えております。また、現在の展示終了後も郷土博物館の展示物、パネルを中心に村岡花子さんの足跡をご紹介できる展示を準備しているところでございます。

次に、川瀬巴水特別展終了後、馬込文士村に関する展示を希望するとのご質問でございますが、郷土博物館では、馬込文士村常設展の中でも引き続き村岡花子さんの展示をしてまいりますが、平成26年９月から予定してございます馬込文士村を題材とした特別展におきまして、赤毛のアン記念館・村岡花子文庫と可能な限り連携し、村岡花子関連資料の展示をしてまいります。また、文化の森や馬込図書館などと協働しながら、大森地域の文化資産である馬込文士村関係資料を広く紹介していく予定でございます。

次に、発達障がいの支援に関するご質問に順次お答えをさせていただきます。

まず最初に、固定学級に通う児童・生徒が能力に応じた教科書で授業を受けることができるのかとのご質問でございますが、固定学級では、子どもたちの障がいの種類、程度、能力、特性に応じた教科用図書を使って授業を行ってございます。したがいまして、特定の教科の学力が高い児童・生徒は、その状況に応じて通常の学級で使用しているのと同じ教科用図書を使って指導を受けてございます。

次に、個別の教育支援計画と個別指導計画の作成の目的についてのお尋ねでございます。個別の教育支援計画は、障がいのある児童・生徒一人ひとりのニーズを正確に把握し、適切に対応していくという考えのもと、長期的な視点で乳幼児から学校卒業後までを通じて一貫して的確な教育的支援を行うために作成するものでございます。一方、個別指導計画は、児童・生徒一人ひとりの障がいの状態等に応じたきめ細かな指導が行われるように、学校における教育課程や指導計画、当該児童・生徒の個別の教育支援計画を踏まえて、より具体的に児童・生徒一人ひとりの教育的ニーズに対応して、指導目標や指導内容・方法

等を盛り込んだものでございます。

個別指導計画はどのように決められるかというご質問でございますけれども、通常の学級に在籍する児童・生徒に対しては、その実態や行動特徴等を把握し、担任１人ではなく、校内の他の教員の協力も得ながら、適切な指導及び必要な支援を具体化するために、校内委員会で組織的に作成してございます。通級による指導を受けている児童・生徒の場合は、在籍している通常学級と通級している学級のそれぞれで作成してございます。作成に 当たっては双方が協議を十分に行い、互いの役割を生かして作成するようにしてございます。今後とも、指導の手引きの活用、研修、指導助言を通して教員の力量を高めるとともに、保護者のニーズを十分に受け止め、一人ひとりの子どもの実態に応じた適切な個別指導計画を組織的な取り組みのもとに作成するよう指導してまいります。

次に、昨年度の中学卒業生の進学率でございますが、平成24年度の大田区における区立中学校卒業者数は3651名で、そのうち進学者は3591名ということで、進学率は98.36％でございます。それ以外は就職等でございます。なお、固定学級の進学率でございますけれども、卒業者数は38名で、高等学校全日制、特別支援学校、専修学校、各種学校を含めた進学者数は38名でございますので、進学率は100％でございます。

ひきこもりの生徒に対する支援についてのご質問でございますが、担任が家庭訪問などを行っても改善が見られない場合は、スクールカウンセラーや教育センターによる教育相談につなげるようにしてございます。また、メンタルフレンドを家庭に派遣し、信頼関係を築きながら、適応指導教室や相談学級の入室、入級につなげていく取り組みも行ってございます。さらに、平成26年度からは教育センターにスクールソーシャルワーカーを配置し、家庭環境に起因して学校不適応になっている生徒の支援なども行っていく予定でございます。このような取り組みとともに、在籍校や適応指導教室での進路指導、さらには東京都教育相談センターによる進路相談なども行ってございます。

最後になりますけれども、通級指導を受けている生徒や不登校の生徒の進路についてのご質問でございます。

都立のエンカレッジスクール、また単位制で行ってございますチャレンジスクールをはじめ、高校等へ進学している生徒は多数ございます。平成24年度に適応指導教室に通室していた中学３年生について申し上げますと、23名の通室者のうち、５名は在籍校に復帰してございます。それぞれの学校で進路指導を受けているということでございます。残り18名のうち17名につきましては、適応指導教室に通室しながら進学に結びつけてございます。なお、中学校卒業後の教育相談につきましては、東京都教育相談センターで行っているところでございます。私からは以上でございます。